

VII. 調査成果の検討と考察

(1) 河内平野における中・近世の耕作形態の一樣相

—島畠とはなにか？ 池島・福万寺遺跡の例を中心に—

新倉 香

1. はじめに

「池島・福万寺遺跡」と聞いてまず頭に思い描くのは、弥生時代全般にわたって連綿と続く水田遺構であろう。しかし、もうひとつ「連綿と続く」という意味で検出される遺構群がある。中世から近世にかけて展開している「島畠^{しまばた}」である。聞き慣れないこの「島畠」とは、土を島状に盛り上げて造成し、上面で畑作を、周囲では水田などを行なうといった、耕作形態の一つである。島畠は、「はたけ」という性格上、当時の面が上面からの攪拌をうけて削平された状態で検出されるため、どの層とどの層の作土が同時代に対応していたのかを把握するのがむづかしく、その形成過程をとらえるのになかなか一筋縄ではいかない困難な遺構であったりするのである。

ところで、近年、近世の遺構面に関する発掘調査について、全般的に粗略な扱いをうける傾向がみられる。特に農耕に関する遺構については、報告書の記載等を見ても今でこそ

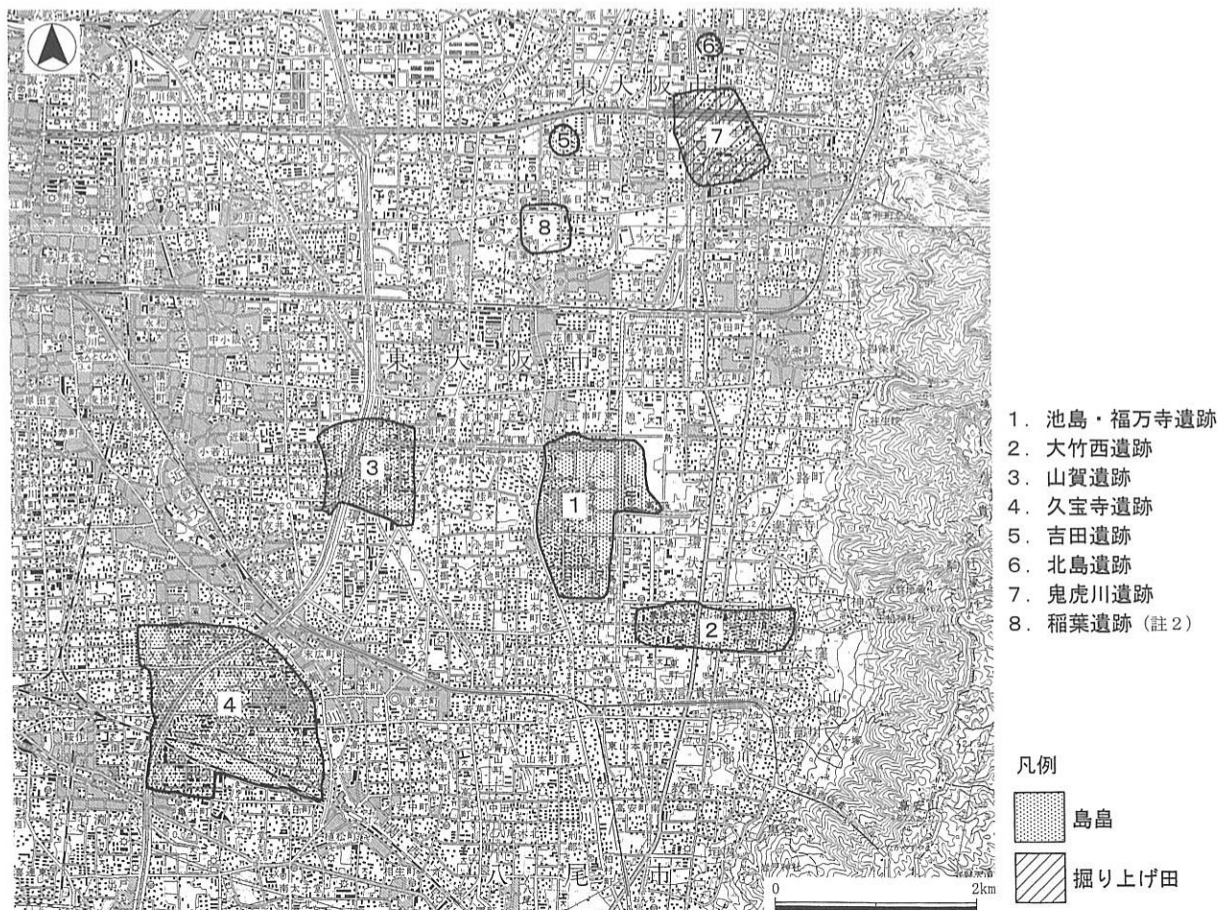


図85 池島・福万寺遺跡と「島畠」「掘り上げ田」が検出された遺跡位置図

詳細に記述されているものもみられるが、たいてい2、3行の説明でおわってしまい、面として調査されることなく「飛ばされて」しまうものも少なくはない。

ここでは、この中・近世に展開する耕作形態の一つである「島畠」について、①島畠のあり方と河内平野に展開するその他の土地利用についてまとめ、②池島・福万寺I期両地区に展開する島畠景観について簡単に整理し、③中・近世に関連する遺構、特に耕作遺構などの発掘調査の必要性について述べていくことにする。

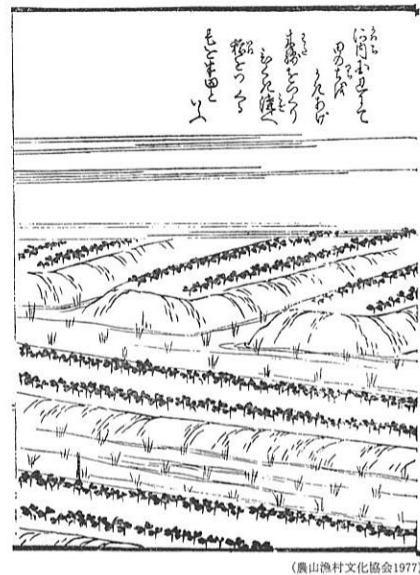


図86 『綿圖要務』にみられる島畠

2. 島畠の定義—島畠と掘り上げ田—

島畠は、

I：水田の「地下げ」を主目的とするような形で形成

II：もともと水田として利用していたが

(a)そのうちやや水がかりが悪い部分に造成

(b)洪水堆積物によってそのような条件になった場合に造成

III：砂丘地帯・自然堤防部などの開発・水田化の際に造成されたもの、

に分類される(金田1993)。うち、当遺跡において検出される島畠は、先述したように、池島I期地区の第2-1面(18世紀代)においてI類を、その他はII類で造成されているものが多いことが明らかにされている¹⁾。

発掘調査によって検出される島畠は、当遺跡以外にも何例かみられる(図85)。河内平野では、大竹西遺跡(同-2)、吉田遺跡(同-5)、山賀遺跡(同-3)、久宝寺遺跡(同-4)、稲葉遺跡(同-8)²⁾などがあり、うち、前者2例は12世紀代の遺構として、後者2例は近世の遺構としてとらえられている(井上1999a)。

河内平野以外の近畿内で、比較的良好に報告されている島畠例として、京都府八幡市内里にある内里八丁遺跡^{うちきとはちちょう}があげられる(京都府埋蔵文化財調査研究センター1995、同1998)。同遺跡は地形的にみて、現在では木津川西岸の沖積平野にあたり平坦な水田地帯を呈している。しかし、微地形をみると木津川の支流

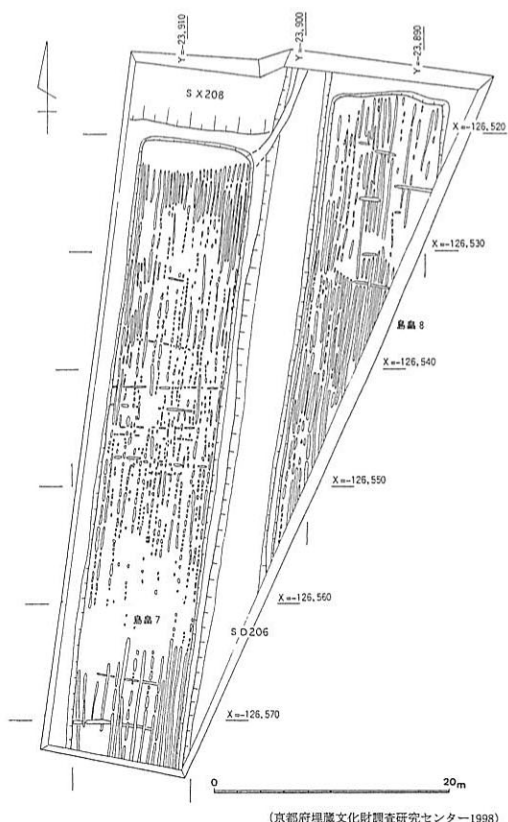


図87 内里八丁遺跡の島畠平面図

島畠の
分類

内里八丁
遺跡

と考えられる旧河道やそれにとまなう自然堤防状の微高地がいくつか点在しており、旧地形がやや起伏にとんだ景観であったことがうかがえる。この遺跡は、こうした微高地の一つに立地し、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期前半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物群、鎌倉時代以降の島畠などが展開する複合遺跡である。

内里八丁遺跡から検出されている島畠は、広範囲な微高地上に畠とする部分を残して周囲を掘り下げ、その土砂を畠とする部分に盛り上げて造成する金田分類のⅢ類にあたる(図87)。図87の島畠は長さ50m、幅13mを測る南北に展開する長大な島畠で、出土した瓦器や土師器から13世紀後半～14世紀頃に造成されたと考えられている。

また、報告書の記載によると島畠間の溝 SD206は、「島畠の造成によって作られた低部の排水に関わる」とあり、この地が水田として機能していたのかが不明である。ただし、異なる調査区で検出された島畠の低地部分については、「低地部分に牛の足跡などを多数検出している」との記載があることから、水田として使用していた可能性がうかがえる。島畠の上面では、複数の耕作痕跡が検出されており、上面では畠を、低地部分では水田を行なうといった島畠景観が展開していたことが理解できる。

先にあげた当遺跡に近接する大竹西遺跡の島畠も、同様にⅢ類で造成された島畠であることが明らかにされている(財八尾市文化財調査研究会1997、井上1999a)。このように中世の島畠はⅢ類で造成されているものが随所にみられ、このことから、この時期に微高地開発が頻繁に行なわれたことがうかがえる。

河内平野にはこのほかに、島畠のように「土を盛り上げ、その上で耕作をする」という点において同様な耕作形態を呈するものがある。「掘り上げ田」と呼ばれるもので、こちらの場合は、上面のみを耕作面として利用し、掘り下げた面は水回りのための溝や池等として使用しており、耕作地としての機能は果していない。つまり、「掘り上げ田」とは、櫛の目状に土を盛り上げ、水面すれすれの水田とするものであり、低湿地に適した水田として

大竹西遺跡

掘り上げ田



「掘り上げ田」 田代町市郷田町西郡 昭和37年
(京大阪市遺跡保護調査会1976)

図88 「掘り上げ田」の分布図



写真113 現在の「掘り上げ田」

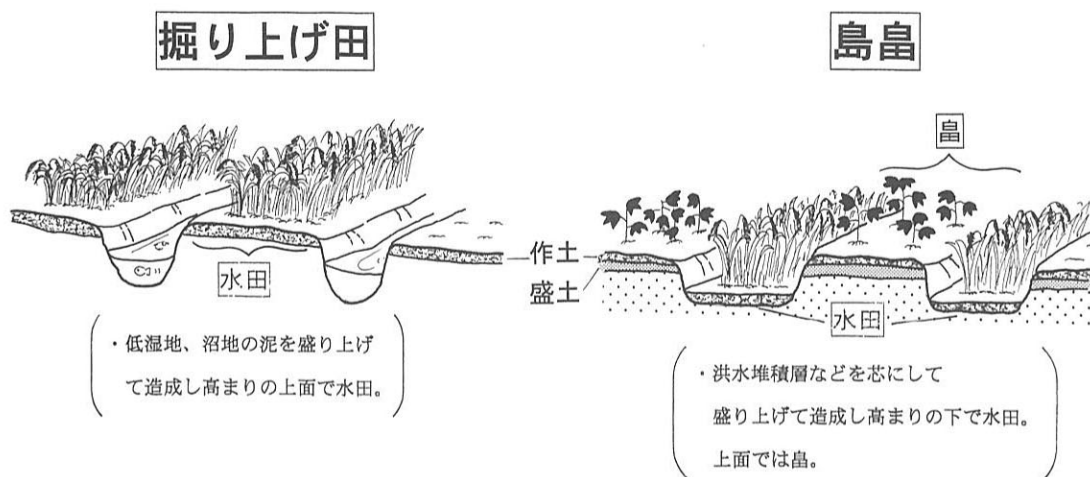


図89 「島畠」「掘り上げ田」の概念図

造成されている。島畠と比較して現在でも多く採用されている耕作形態で、特に関東平野北西部などに多くみられ、濃尾平野の輪中地帯なども同様な形態であることが指摘されている(能登1996)。河内平野において低湿で水はけの悪い土地といえば、生駒山西麓部に隣接する平野部に該当する。現国道170号線と阪神高速13号東大阪線とが交差する地点の南東部分においては、かなり埋没してはいるが、現在でも水(池)の中に島状の盛土が部分的に点在する景観が展開している(図88、写真113³⁾)。

北島遺跡

発掘調査で明らかにされている掘り上げ田の例としては、北島遺跡(図85-6)や鬼虎川^{きとらがわ}遺跡(図85-7)などがあり、近世の遺構として確認されている(東大阪市文化財協会1996、同1997)。特に、北島遺跡については、古代～中世では一般的な畑作を行っていたが、近世において急速な低湿地化がすすんだことにより掘り上げ田が造成されているとあり、この地域では自然環境の変化に適応した耕作形態をとっていたことが理解できよう(井上1999a、東大阪市文化財協会1996)。

この掘り上げ田における、平坦地を掘り下げて「土を盛る」という造成過程に関していえば、島畠Ⅰ類の「地下げ型」に類すると思われる。しかし、低位部分の堆積状況を見ると次のように区別することができよう(図89)。多少狭い間隔であれ、水が常時停滞していた状況つまり、止水堆積を示すような堆積状況が判断されればそこは「掘り上げ田」であった可能性が強く、作土が確認されればこの高まりは「島畠」として利用されていたことが把握できる⁴⁾。

田畠輪換

「掘り上げ田」の上面でも、常に水田として利用していたのではなく、畑として耕作されていたことも発掘調査から明らかにされている。このことは、現在において収穫が終わった田んぼで次に畑として利用する「田畠輪換」形態を援用すれば理解できるものと思われる。要するに、発掘調査によって検出された高まりが島畠か掘り上げ田であるのかを区別をつけるには、高まり部上面が水田か畠かのちがいでだけでは判断できない。よって、低い部分での状態を判断しながら区別するのが妥当であるといえる。

さて、この両者の耕作形態はいつ頃からみられるものなのだろうか。「掘り上げ田」で、発掘調査によって明らかにされている例は河内平野では、平安時代にまでさかのぼるとい

われている(東大阪市文化財協会1997)。一方、島畠は、近年の調査成果をみるならば、13世紀初頭にその成立を考えてもよいと思われる。ただし、島畠という概念が、ただ砂を盛った状態のものと、畦畔が拡大化したもののどちらを示すのかによって、その初現時期が変わるものと思われる。

河内平野に分布する耕作形態は、以上の2種類が展開している。両者の分布の差異については、現在の河内平野における耕作形態の分布概要をまとめた労作『皿池の調査報告』(東大阪市遺跡保護調査会1976)によると、地形に即した土地利用がなされていたことが指摘されている。また同報告書では、現在の池島町から以北では「掘り上げ田」が、以南では島畠が展開している、と解いている。特に島畠は、旧大和川が東の玉串川と西の長瀬川とに分かれたその両方にはさまれた地域から、長瀬川より西では上町台地まで展開し、南限は大和川より1、2 km 北の部分、北限は旧深野・新開^{ふこの しんがい}両池であった地域まで、とある。

ともあれ、島畠にせよ、掘り上げ田にせよ、低湿等で耕作に不向きであった土地を、いかにして有効利用できるかと模索した耕作形態であることが理解できよう。

島畠・掘り上げ田の分布地域

低湿地での土地利用

3. 池島Ⅰ期地区と福万寺Ⅰ期地区の諸成果

上記の『皿池の調査報告』では、島畠は玉串川から以東にはあまり顕著ではない、との指摘がなされているが、該地にあたる恩智川と生駒山西麓の間にも広く分布していることはすでに周知のことである。現在の恩智川の東側に立地している田畑の中にも、その残骸と思われるかまぼこ状の土盛が確認できるからである。

さて、当遺跡に展開する島畠は、福万寺Ⅰ期地区に関しては第7面(11世紀後半～13世紀初頭)から、池島Ⅰ期地区に関しては第5-2面(14世紀代)から出現し、機械掘削終了面にあたる近世ないしは現在までみられる。両地区は、恩智川をはさんで土層の堆積状況が異なっており、先述のように、両地区の層序を直截的に結ぶことは困難である(III章(2)参

池島・福万寺遺跡の島畠初現時期

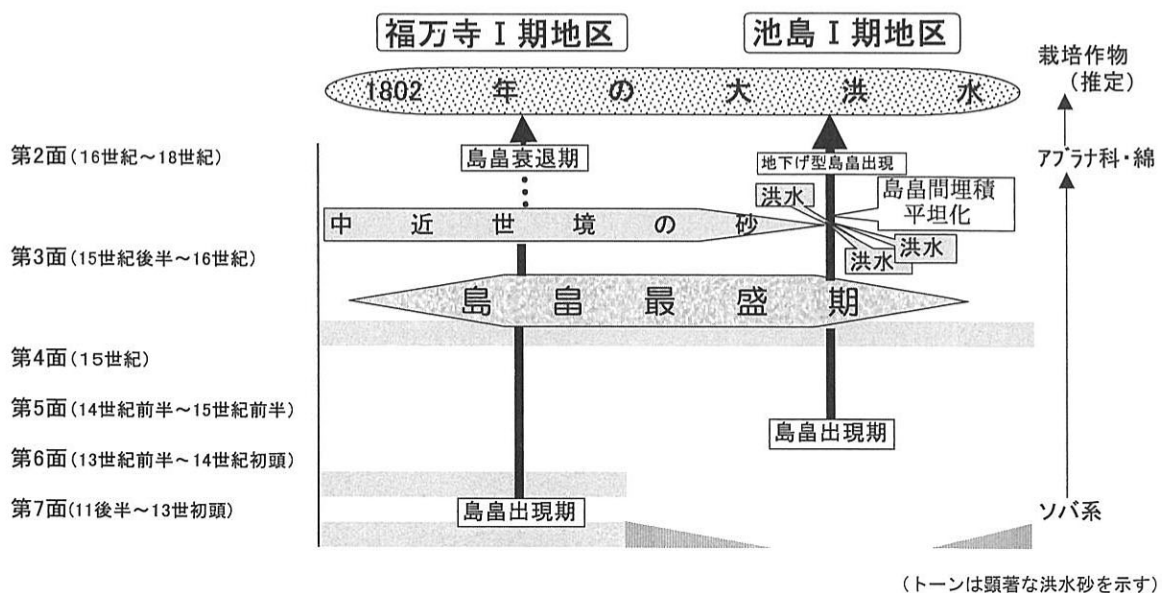


図90 福万寺Ⅰ期地区と池島Ⅰ期地区の景観変遷モデル図

照)。例えば、「中近世境の砂」と呼称している洪水砂層について、以前は、この砂を境に中世と近世とに時期を区別していたが、この認識について再検討しなければならないことが明らかにされつつある。つまり、福万寺Ⅰ期地区においては比較的厚い砂の堆積層が調査区全体にみられたが、池島Ⅰ期地区ではこのような厚い堆積層は認められず、何層もの薄い洪水堆積層が存在しており、しかも、福万寺Ⅰ期地区と対応する層があいまいになっている。よって、両地区の状況を厳密に同じ時間枠に設定して考えるのはいささか困難な状況ではあるが、比較できる

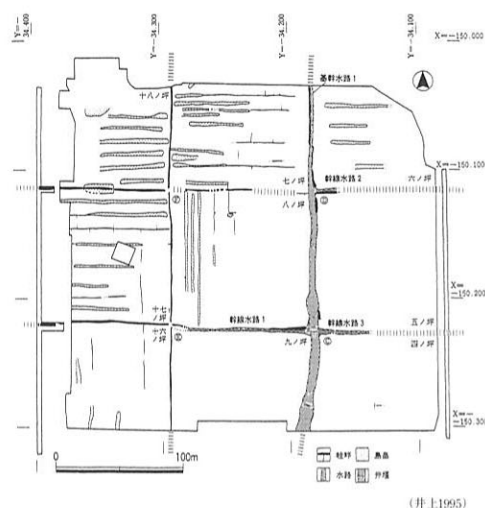


図91 福万寺Ⅰ期地区第7面全体図

材料を積極的に活用すると、両地区は以下のような関係で展開するととらえられる(図90)。

島島の初現
時期の相違

島島の初現時期が両地区で異なることについては、それぞれの洪水堆積物の供給源がどこかという堆積環境に起因している。両地区の島島の初現形態はともに、畦畔などの造成物に堆積した洪水砂を盛寄せて上面で畠を行なう、という先述のⅡ(a)類のタイプに相当する。以下、地区ごとに島島が展開する景観について簡単にまとめていく。

福万寺Ⅰ期
地区

福万寺Ⅰ期地区での島島は、「走」の七、八、十七、十八坪を南西から北東に向けて斜めにのびて出現し、これらは玉串川を供給源とする洪水堆積物によって形成されたと考えられている(井上1999a、図91⁵⁾)。それぞれの島島の形状は、畦畔などに土砂を寄せ集めた形を呈している。これは坪ごとの水回りを考慮して、水田面の平坦化を図るために実施した作業の結果において生じた土を使って畦畔を太くした、とある。そして、この部分を畑として有効利用したのが「島島」の起源である、と井上氏は説いている(井上1999a)。

続いて、福万寺Ⅰ期地区における島島が全面展開するのは、第3面の時期である(Ⅲ章(2)図9参照)。九ノ坪では畝が検出されており、水田ではなく畑作も行なわれていたことが想定できる。しかし、全体的にみてこの九ノ坪のみ畑作をしていたとはいいがたい状況である。季節も考慮すべき問題であるので一概にはいえないが、九ノ坪では常に「畑」であったのではなく、先にも述べた「田畠輪換」が行なわれていたと考えられる。第2面の段階では、第2-2面ではまだ島島が形成されており(Ⅲ章(2)図8参照)、八ノ坪では洪水堆積層を芯にした島島が造成されている。しかし、第2-1面になると土地の平坦化がすすみ、島島による土地利用は減少してしまったようである(Ⅲ章(2)図7参照)。

池島Ⅰ期
地区

一方、池島Ⅰ期地区での島島の初現は、「河」の十九、三十坪からみられる⁶⁾。供給源となる河川が恩智川とは考えられず、生駒山地から流下する雨

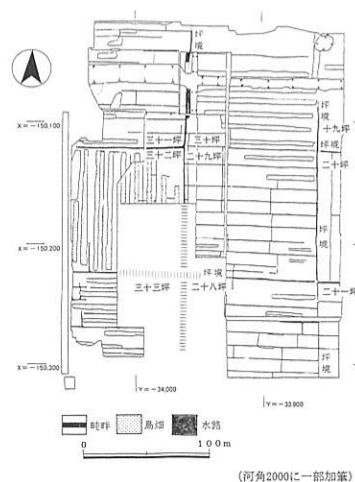


図92 池島Ⅰ期地区第3-3面全体図

福万寺Ⅰ期地区・第2面～第7面出土遺物 (92-6, 92-7除く)

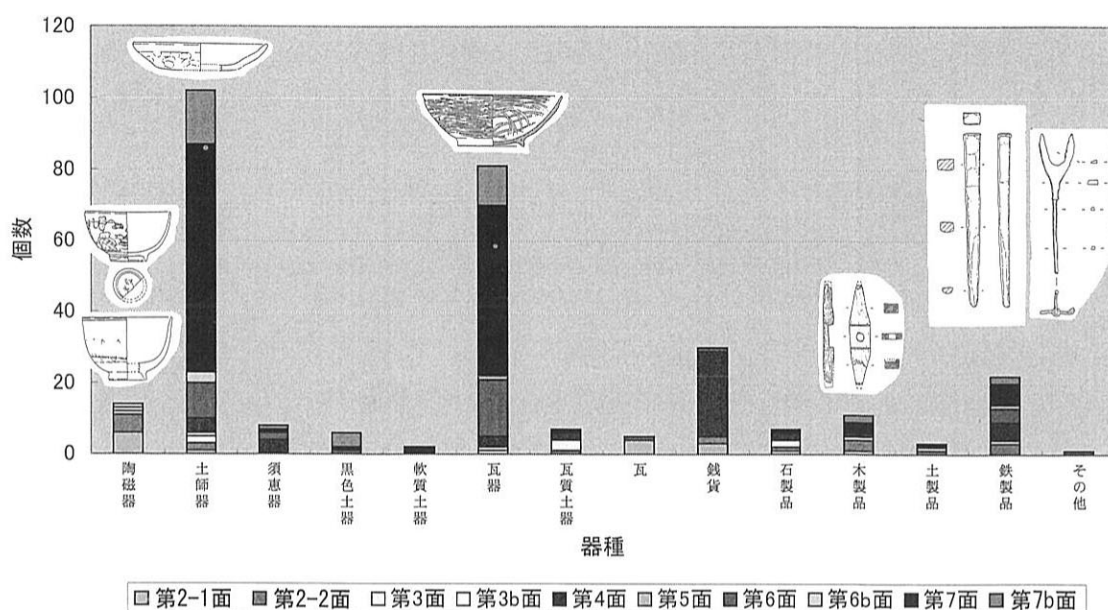


図93 福万寺Ⅰ期地区出土遺物集計図

水を集積する、より東側の河川などが考えられよう。その後、第4面の段階においても島畠の景観は、福万寺Ⅰ期地区ほど顕著にはみられない。そのまま十九、三十坪の島畠を踏襲し、あらたに三十一、三十二、三十四坪に部分的にみられる（河角2000）。

池島Ⅰ期地区での島畠が全面展開するのは、福万寺Ⅰ期地区同様、第3-3面（15世紀後半）の段階である（図92）。特に二十九、三十、三十二、三十三坪に島畠が多く造成されるが、第4面を覆っている洪水堆積層の分布状況により島畠の展開状況が異なる。

第2面は、部分的にではあるが、第2-2面の段階で土地が一旦平坦化されていることが明らかにされている。この景観は池島Ⅰ期地区全体にみられるのではないようであるが、そのために、水回りをよくするために全体的に土地改良が行なわれている。これが、第2-1面（19世紀初頭）と称される面で、いわゆる「地下げ型」と呼ばれる島畠の造成が広く展開する時期である。

なお、本書で報告した98-3調査区は、上記の池島・福万寺Ⅰ期両地区には含まれず、福万寺Ⅱ期地区にあたる（図5参照）が、ここでも島畠が検出された。これらの島畠は、本調査区の第5面段階の畦畔に第4面のある時期に生じた洪水堆積層が覆い、これらをかき寄せその上面を耕作して徐々に島畠が拡張されていったものと理解できた。以前に存在していた畦畔を基準（芯）にして島畠を拡張していく様相は、福万寺Ⅰ期地区にもみられたタイプであり、両者が同様の環境や状況のもとにあったことが推定できよう。

98-3
調査区の
島畠

次に、島畠が検出される面から出土する遺物にはどのようなものがあるのか、福万寺Ⅰ期地区を例にとって概観してみることにする（図93⁷⁾）。基本的に出土量は少ないが、随所に特徴ある遺物が出土している。例えば、第2面から陶磁器などの碗が出土している。碗は、その当時の人々の日常汁器であり畑仕事の合間の休息や食事に使用したものと考えられよう。また、「中近世境の砂」と呼ばれる砂層からは糸巻きが出土している。これは、綿

作にともなうものと考えられ、当時の農作物の内容が推定できよう。ほかに、特異な遺物としてキセルなども出土している。これは、『綿圃要務』（農山漁村文化協会1977）にキセルをくわえながら草取りをしている男の人の絵が描かれていることから、現在の農作業と同じようにくわえタバコをしながら作業をしていたことが頭に浮かぶだろう。

4. 「島畠」とは…？

最後に、島畠にかかわる雑感を述べ、この小論をおえることにする。

上記してきたように、その土地の本来的な条件と洪水等によってもたらされた二次的な環境変化のもと、「いかにして水田を行なうか」という考えから生み出された島畠は、その当時の人々の血と汗と涙の結晶なのである。特に当遺跡における島畠では、洪水堆積物を取りのぞく復旧作業によって生じた「副産物的な賜物」であり、この地ならではの出現のあり方と形成過程をたどることができる。このような具体的把握を可能にさせるサインを顕著に内包する遺構を詳細に調査することによって、この地の土地利用や環境、さらには、それらに対して人間がいかにかわってきたかを読みとることができるのである。これらは現代の私たちの生活にも、部分的にせよ活用できるといえる。当遺跡のように、近世までも含めた発掘調査をしているからこそ、文献史料等にはのこされていない、現代人の近い過去におこった出来事や奮闘の実態を理解できるのである。よって、近世の耕作地だからといって決してないがしろにしてはならないのである。

〔謝辞〕上記の論考をすすめるにあたり、池島分室の皆さまからはご高配を賜りました。特に、小野久隆、秋山浩三、井上智博、岡本茂史の各氏からは大変多くのご教示を得ました。また、本稿の一部は、1999年9月に実施された当遺跡「立坑勉強会」で口頭発表したことがあり、その折にも出席の方々から諸々ご指導を受けました。記して感謝いたします。

〔註〕

- 1) 池島Ⅰ期地区における「地下げ型」島畠の認識については、(財)大阪府文化財調査研究センター岡本茂史氏ご教示による。
- 2) 稲葉遺跡に関しては、「段状遺構」との報告がある。報告書によれば、「落ち込んだ部分の平坦面には人・牛の足跡、また段の上面には浅いU字状の溝が段の方向と同一の東西方向をとって走り、人・牛の足跡が検出されている」とある。この状況から判断すると島畠の可能性はあるが、不確定なため保留にしている。
- 3) 写真撮影では、(財)大阪府文化財調査研究センター秋山浩三氏のご協力を賜った（2000年3月撮影）。
- 4) 掘り下げた部分の下面の堆積状況に関しては、(財)大阪府文化財調査研究センター井上智博氏のご教示による。
- 5) 福万寺Ⅰ期地区に関する土地景観については、現在同地区の本報告作成途中であるので、井上氏の論考ほかに準拠していることをお断りしておく。
- 6) 池島Ⅰ期地区の理解に関しては、岡本茂史氏ほかのご教示による。
- 7) 福万寺Ⅰ期地区の92-6・92-7両調査区は概要未刊行のため、数にはいれていない。また、本報告のための整理作業中のため、あらたな見解が生じる場合もあることをお断りしておく。

〔引用・参考文献〕

- 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『三ツ井遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第87集
伊藤憲司・高橋幸仁 1996 「堀田の築立と消滅過程」『変容する輪中』 古今書院
井上智博 1995 「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程—池島・福万寺遺跡(福万寺Ⅰ期地区)の調査から—」『大阪文化財研究』第9号 (財)大阪府文化財調査研究センター
井上智博 1999a 「島畠の考古学的研究—池島・福万寺遺跡の事例の再検討—」『光陰如矢—荻田昭次先生古稀記念論集—』「光陰如矢」刊行会

- 井上智博 1999b 「池島・福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『調査研究報告』第2集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 大阪府教育委員会 1986 『稲葉遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- 大阪府教育委員会 1990 『吉田遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 『山賀遺跡(その2)』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 『山賀遺跡(その5・6)』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1995 『西大井遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第1集
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1996 『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1999 『池島・福万寺遺跡ってなあに?—池島・福万寺遺跡現地公開資料—』(コピー版)
- 大野 薫 1989 「島畑の考古学的調査—大阪府池島遺跡の事例—」『郵政考古紀要』15 大阪・郵政考古学会
- 河角龍典 2000 「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動—大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例—」『歴史地理学』42巻第1号 歴史地理学会
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 「内里八丁遺跡」『京都府遺跡調査概報』第67冊
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998 「内里八丁遺跡」『京都府遺跡調査概報』第84冊
- 金田章裕 1985 「条里地割内部における島畑景観の形成」『条里と村落の歴史地理学研究』 大明堂
- 金田章裕 1993 『微地形と中世村落』吉川弘文館
- 阪田育功 1997 「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- (財)農山漁村文化協会 1977 『日本農書全集』15
- 能登 健 1996 「中・近世の農業」『考古学からみた日本の歴史』16 産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業 雄山閣
- 原田信男 1999 『中世村落の景観と生活—関東平野を中心として』 思文閣
- 東大阪市遺跡保護調査会 1973 『池島町の条里遺構—調査概報—』
- 東大阪市遺跡保護調査会 1975 『池島町の条里遺構—48年度・49年度発掘調査概要—』
- 東大阪市遺跡保護調査会 1976 『皿池の調査報告』<東大阪の歴史Ⅰ>
- (財)東大阪市文化財協会 1996 『北島遺跡の耕作地跡と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—』
- (財)東大阪市文化財協会 1997 『鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告』
- (財)八尾市文化財調査研究会 1997 『大竹西遺跡第3次発掘調査現地説明会資料』